

宇陀を駆けた人々

「林 豹吉郎 篇 1」

天誅組の誕生

天誅組をご存じですか。江戸時代の末期に結成された尊皇攘夷派のグループです。このグループに宇陀出身の林豹吉郎（砲術家）が加わっていました。

江戸時代の末、江戸幕府は鎖国から開国へと政策を変え、諸外国の勢力が日本へ入ってくることとなりました。当時、これを脅威と考える人々が少なくありませんでした。また、幕府の権力は、弱くなりつつあり、幕府に対して批判的な人々もいました。

このような幕末の状況で、尊皇攘夷派（外国勢力を排除・幕府を倒して天皇中心の政治を行おうとするグループ）と公武合体派（朝廷と幕府とが協力して政治を行おうとするグループ）とが対立していました。

文久3年8月13日、孝明天皇が、攘夷を祈願するために大和（奈良県）へ行幸することが決まりました。翌14日には、尊王攘夷派約40名が京都東山の方広寺に集まり、「天皇行幸

の先鋒」となろうとグループをつくりました。明治維新の魁となる「天誅組」の誕生です。

彼らは、京都伏見から淀川を下り、大坂（大阪）から海路で堺へ上陸、そして河内（富田林・河内長野）へと向かいました。河内で同志を加えた天誅組は、総勢約80名となりました。

8月17日、河内から大和の五條へ着いた天誅組は、最初の武装蜂起を実行します。幕府の施設である五條代官所を襲撃し、代官らを殺害したのです。

この後、代官所近くの寺を本陣として、「五條御政府」と称する新たな政治機関を設置し、五條を天皇の直轄地とする宣言を行いました。



文・柳澤一宏（文化財課）



新しい年の始まり

「やさしい言葉が響き合う年に」

新しい年の始まりにあたり、どんな一年にしようかと、決意を新たにされていることと思います。最近は何かと「不安」が先行しがちですが、お互いの願いが実現に近づく、キラリ輝く一年にしたいものです。

さて、自動車に乗るとカーナビが道案内をし、様々な情報を言葉で届けてくれます。「近くに〇〇があります」「この先、カーブがあります」長時間運転を続けていると、「長時間の運転お疲れ様です」とやさしい言葉もかけてくれます。また、身近にある家電も言葉を発するものが増えています。会話するロボットも開発が進んでいます。

機械がどんどん話すようになってきていることに比べ、私たち人間はどうでしょうか。「スマホ」や「タブレット」など、情報機器に没頭し、機械を媒介としてのコミュニケーションに熱中している姿が多くみられるように思います。言葉のやりとりもSNSで行うなど、相手の表情が見えず、響き合う言葉に

よる感情注入を感じることが少なくなっているのではないでしょうか。学校では、子どもたちのコミュニケーション能力の低下が危惧され、改善していくための学びの工夫や教育の推進が重要視されています。

こうした中、人と人との顔が見えるつながりやコミュニケーションについて、今一度考えてみる人が大切ではないでしょうか。人は互いに声をかけあったり、意見交換したり、言葉を通じてコミュニケーションを図り、理解し合うことができます。

やさしい心や愛情のこもった言葉は、人と人とを心地よくつないでいきます。

私たちの家庭や地域が「やさしい言葉であふれ、あちこちで響き合う」そんな一年にしていきたいものです。

